

# 大学生の親としての準備性

## — 乳幼児と関わる体験の頻度に関する分析 —

森 俊之

仁愛大学人間学部

Readiness for Parenthood in University Students

An Analysis of Interaction Frequencies with Young Children

Toshiyuki MORI

Faculty of Human Studies, Jin-ai University

大学生の乳幼児と関わる体験の頻度と親としての準備性を質問紙により調査した。調査の結果、多くの学生が何らかの形で乳幼児と関わる体験をもっており、体験のない学生は約 10%のみであった。乳幼児と関わる体験をもつ学生も 1 日程度という者からほぼ毎日という者まで存在した。親としての準備性に関する尺度は、因子分析により「育児体験の機会」、「育児への自信」、「親になるイメージ」、「乳幼児への好意感情」、「育児への肯定的評価」、「育児への否定的評価」の 6 因子が抽出され、それぞれの因子毎に、乳幼児と関わる体験の頻度による比較が行われた。その結果、全体的には乳幼児と関わる体験が多いほど親としての準備性が高い傾向があること、親としての準備性の形成に必要な乳幼児との関わり頻度は因子により異なり、親としての準備性の形成に一定のプロセスがある可能性が示された。

キーワード：親としての準備性、乳幼児と関わる体験、大学生

親としての成長が難しい時代と言われる。児童虐待や育児放棄が社会問題として叫ばれ、育児不安や育児ストレスを抱える親も少なくない。こうした問題の背景には、少子化や核家族化、地域社会の希薄化など、育児環境の変化が関わっているとされている。すなわち、少子化による兄弟数の減少や地域社会での交流の希薄化により乳幼児と触れ合う機会を持たないまま親になる人が増えていることがその一因であり、核家族化や地域交流の希薄化により育児が孤立化していることも一つの要因とされる。両者に共通することは、親として成長するための学習機会の減少である。

親としての役割を遂行するために必要な資質や準備性(レディネス)は、親準備性や親性準備性と言われ、1980 年代以降、心理学や教育学、母子保健の分野等で研究が行われてきた。親準備性の概念は、あいま

であり、研究者によってとらえ方が異なる場合もある。岡本・古賀(2004)は、幾つかの先行研究にふれながら、親準備性には大きく 3 つの内容があるとしている。すなわち、①子どもへの関心や好意感情など子どもに関わるもの、②子育てへの構え、育児観、性・結婚・夫婦役割・育児への意識や受容など子育てに関するもの、③親志向性、親への親和性、親への同一化など親となることに関するものの 3 つである。親としての準備性を測定するための尺度もいろいろと検討されている(e.g. 松岡ら, 2000; 岡本・古賀, 2004; 佐々木, 2007)。

親としての資質や準備性は、一定の経験を通して高められると考えられる。自分が親からどのような養育体験を受けたか、幼少期に子どもの相手をしたり遊んだりした経験が多いかなどにより、子どもに対する

感情や育児行動に違いがみられることが数多く示されている (e.g. 井上・深谷, 1983; 中西・牧野, 1989; 斎藤ら, 1992; 松岡ら, 2000; 青木・松井, 1988). また, 看護師養成教育や保育士養成教育など, 特定の専門教育を受けることにより, 親としての準備性が高められるとする研究もある (e.g. 森下, 1992; 森, 2002).

こうした時代背景や研究成果から, 青少年に対して小さな子どもと関わる機会を設定する取り組みが展開されてきた. 平成15年に成立した次世代育成支援対策推進法に基づく行動計画策定指針にも「中学生, 高校生等が, 子どもを生み育てることの意義を理解し, 子どもや家庭の大切さを理解できるようにするため, 保育所, 幼稚園, 児童館, 乳幼児健診の場等を活用し, 乳幼児と触れ合う機会を広げるための取組を推進することが必要である」とうたわれ, 多くの自治体で取り組まれている. また, 大学生が子育て家庭のサポートをすることで, 子育て家庭の負担感や孤立感を解消すると同時に, 大学生の親としての成長を促すという取り組みもみられる (川瀬, 2009).

さまざまな取り組みにより, 小さい子どもと関わる機会は増えているが, こうした子育て体験的な関わりは, 事業主体によって内容がさまざまである. 参加対象者として小学生を対象にしているところもあれば, 高校生を対象としているところもある. また, 体験の頻度も, 数日にわたって数回実施しているものも見られるが, 多くの体験が単発的なものであると言われていた (宮崎, 2003). 親としての育ちが学習によるものであると考えるならば, こうした体験の機会の頻度は重要な要因であると考えられる.

本研究では, 小さい子どもと関わる機会をもつことにより, 親としての資質や準備性が高められるかをあらためて確認するとともに, 乳幼児と関わる体験の頻度が親としての準備性の形成にどのような影響を与えるかということ, 大学生への質問紙調査によって明らかにすることを目的とした.

## 方法

### 1. 調査対象者

文系私立A大学の学生101名 (男性37名, 女性

64名) および保育系私立B短期大学の学生98名 (女性98名) の計199名に調査を依頼した. なお, 実際の分析にあたっては, 青年期の学生を対象とすることから, 30歳以上の学生のデータを除外した. また, 回答の記入漏れのあったもの等も除外し, 結果的に分析に使用したのは178名分のデータであった.

## 2. 調査内容

性別, 年齢等を問う質問とともに, 以下の質問から構成される調査用紙を作成した.

### (1) 乳幼児と関わる機会に関する質問

乳幼児の世話をしたり一緒に遊んだりするボランティア活動への参加, 弟妹や親戚の子など身近な乳幼児の世話をした体験, 学校の授業等で保育所等へ行った体験など, 乳幼児と関わる体験に関する項目を設定して, その体験の有無について尋ねた. 体験がある場合には, その体験の頻度を「1日程度」, 「1週程度」, 「1月程度」, 「ほぼ毎日」の中から選んでもらった.

### (2) 親としての準備性を評価する尺度

親としての準備性を評価するために, 佐々木 (2007) が作成した親性準備性尺度を用いた. この尺度は, 青木・松井 (1988) の作成した「母性準備性尺度」を, 青年期女子だけでなく青年期男子にも使用できるように項目のいくつかを修正し, 信頼性と妥当性を検証したものであり, 「乳幼児への好意感情」(9項目) と「育児への積極性」(13項目) からなっている. 各項目の質問に対し, 「あてはまる」(5点) から「あてはまらない」(1点) の5段階評価で回答を求めた.

上記の22項目に加えて, 川瀬 (2010) による学生保育サポーター事業の親準備教育としての効果を測定するために用いた8項目も質問した. この8項目は, 「育児機会」に関する2項目, 「育児の自信」に関する4項目, 「親になるイメージ」に関する2項目からなる. これらの8項目についても, 「あてはまる」(5点) から「あてはまらない」(1点) の5段階評価で回答を求めた.

## 3. 調査手続き

2009年10月～11月の期間に, 幾つかの授業時間等において前述の調査用紙を配付し, 調査への協力を

依頼した。調査にあたっては、回答は強制ではなく任意であること、回答の内容や回答しないことによる不利益は一切ないことを説明したうえで、無記名にて回答を求めた。

## 結果

### 1. 乳幼児と関わる機会の頻度

乳幼児と関わる機会の有無を確認したところ、乳幼児と関わる機会のある学生は158名、そういう機会のない学生は20名であり、多くの学生がなんらかの形で乳幼児と関わる体験をもっていることが示された。乳幼児と関わる機会の頻度毎に集計すると、「1日程度」という回答が最も多かった。

今回、調査対象とした学生には保育を学んでいる学生も含まれているため、一般の男子学生と一般の女子学生、保育を学んでいる女子学生の3群に分け、それぞれに乳幼児と関わる機会の頻度を集計し、その結果を表1に示した。一般の男子学生と女子学生を比べるとあまり大きな違いはなく、「1日程度」という回答が多く半数を占めていた。保育を学んでいる学生は、授業として保育実習などを体験することもあり、乳幼児と関わる経験がないという回答は見られず、「1週程度」や「1月程度」という回答が多かった。

### 2. 親としての準備性尺度の検討

今回、親としての準備性を確認する尺度として設定した30項目のデータをもとに因子分析を行った。最尤法による因子抽出を行い、プロマックス法による因子回転を行ったところ、6個の因子が推定された。回転後の因子負荷量は表2に示すとおりである。

第I因子は、「普段の生活の中で乳幼児と遊ぶ機会がある」と「普段の生活の中で乳幼児の世話をする機会がある」の2項目への因子負荷が高かった。この2項目は、川瀬(2010)による育児機会に関する2項

目と一致しており、第I因子は「育児体験の機会」因子と考えられる。第IV因子は、「しばらくの間、乳幼児と楽しく遊ぶ自信がある」や「子どもがどんな気持ちでいるか理解できると思う」などの4項目への因子負荷が高かった。この4項目は、川瀬(2010)による育児の自信に関する4項目と一致しており、第IV因子は「育児への自信」因子と考えられる。第III因子は、「将来、自分が親になる姿を想像することができる」と「子どものいる生活がある程度明確にイメージすることができる」の2項目への因子負荷が高かった。この2項目は、川瀬(2010)による親になるイメージに関する2項目と一致しており、「親になるイメージ」因子と考えられる。これら3因子については、いずれも川瀬(2010)の設定した枠組みと一致する結果であった。

第II因子は、「赤ちゃんに関心がある」や「赤ちゃんを見るとかわいいなと思う」など9項目への因子負荷が高かった。これらの9項目は、ちょうど佐々木(2007)による親性準備性尺度のうち乳幼児への好意感情を測定する9項目と一致した。それゆえ、第II因子は「乳幼児への好意感情」因子と考えられる。

第V因子と第VI因子は、佐々木(2007)による親性準備性尺度のうち育児への積極性を測定する13項目への因子負荷が高かった。そのうち、第VI因子は、「育児は素晴らしい仕事だと思う」や「育児をしている親は輝いて見える」など育児を肯定的にとらえる項目に因子負荷が高かった。それに対して、第V因子は、「育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなると思う」や「育児をしている親は疲れてみすばらしく見える」など育児を否定的にとらえる項目に因子負荷が高かった。それゆえ、第VI因子は「育児への肯定的評価」因子であり、第V因子は「育児への否定的評価」因子であると考えられる。

表1 性・専攻別に集計した乳幼児と関わる頻度

	経験なし	1日程度	1週程度	1月程度	ほぼ毎日	合計
男子大学生	9人(24.3%)	18人(48.6%)	2人(5.4%)	4人(10.8%)	4人(10.8%)	37人
女子大学生	11人(17.7%)	33人(53.2%)	11人(17.7%)	2人(3.2%)	5人(8.1%)	62人
保育短大生	0人(0.0%)	4人(5.1%)	29人(36.7%)	40人(50.6%)	6人(7.6%)	79人
合計	20人(11.2%)	55人(30.9%)	42人(23.6%)	46人(25.8%)	15人(8.4%)	178人

### 3. 親としての準備性の因子毎の分析

前節で示された6因子毎に、各因子への負荷の高い項目の平均を求めて得点化し、学生の性別による違いがあるか、保育専攻かどうかによる違いがあるか、また、乳幼児と関わる体験の頻度による違いがあるかを検討した。各因子とも、一般男子学生、一般女子学生、保育系学生の3群間での分散分析とともに、乳幼児と関わる体験の頻度による5群間での分散分析を別々に行った。各条件に割り当てられる人数の歪さより、要因間の交互作用に関する分析は行わなかった。

#### (1) 「育児体験の機会」に関する分析

「育児体験の機会」因子について、性・専攻別の平均得点および標準誤差を図1に、乳幼児と関わる体

験頻度別の平均得点および標準誤差を図2に示した。保育系の学生が他の学生に比べて有意に得点が高く ( $F=4.235, df=2/175, p<.05$ )、保育系以外の学生については男女に差はみられなかった。乳幼児と関わる体験の頻度別に分析したところ、子どもと関わる体験が多いほど、得点が高いことが示された ( $F=15.487, df=4/173, p<.01$ )。

#### (2) 「育児への自信」に関する分析

「育児への自信」因子について、性・専攻別の平均得点および標準誤差を図3に、乳幼児と関わる体験頻度別の平均得点および標準誤差を図4に示した。保育系の学生が、他の学生に比べて有意に得点が高かった ( $F=10.133, df=2/175, p<.01$ )。保育系以外の学生

表2 親としての準備性尺度に対する因子分析の結果

	I	II	III	IV	V	VI
＜育児体験の機会＞						
普段の生活の中で乳幼児と遊ぶ機会がある	1.036	-0.043	-0.098	-0.023	0.116	0.001
普段の生活の中で乳幼児の世話をする機会がある	0.789	-0.035	0.060	0.055	-0.055	-0.017
＜育児への自信＞						
しばらくの間、乳幼児と楽しく遊ぶ自信がある	0.095	0.117	0.102	0.591	-0.077	0.057
子どもが悪いことをしたとき上手に叱ったり注意したりする自信がある	0.097	0.011	0.048	0.544	-0.074	0.038
子どもがどんな気持ちでいるか理解できると思う	0.143	0.103	0.169	0.451	-0.101	0.166
自分ひとりで、しばらくの間、乳幼児の世話をする自信がある	0.159	0.153	0.336	0.362	-0.210	0.000
＜親になるイメージ＞						
将来、自分が親になる姿を想像することができる	0.019	0.137	0.801	0.109	0.152	-0.01
子どものいる生活がある程度明確にイメージすることができる	0.093	0.113	0.734	0.136	0.124	0.032
＜乳幼児への好意感情＞						
赤ちゃんに関心がある	0.015	1.022	0.063	-0.060	-0.040	0.058
赤ちゃんのことに知りたいと思う	0.002	0.875	0.024	-0.005	-0.023	0.150
赤ちゃんを見るとかわいいなと思う	-0.013	0.866	-0.054	0.071	0.027	-0.088
赤ちゃんが好きである	0.017	0.821	0.040	-0.001	0.041	0.053
赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きである	0.002	0.818	0.076	-0.021	-0.003	0.113
赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりする	0.034	0.673	0.012	0.262	0.067	-0.051
赤ちゃんを抱いてみたいと思う	0.041	0.599	0.183	0.054	0.043	0.004
赤ちゃんの世話をすることが好きである	0.046	0.572	0.106	0.156	-0.048	0.085
赤ちゃんに興味がある	0.011	0.462	-0.013	0.247	-0.038	-0.011
＜育児への肯定的評価＞						
育児は素晴らしい仕事だと思う	-0.019	0.024	-0.128	0.147	0.017	0.802
育児は人の生きがいだと思う	0.129	0.134	0.126	-0.037	-0.106	0.609
育児をしている親は輝いて見える	0.107	0.044	0.184	-0.176	-0.075	0.592
育児によって自分自身もまた成長できると思う	-0.045	0.071	-0.028	0.272	0.210	0.541
自分も育児をしてみたいと思う	0.047	0.204	0.319	-0.095	-0.051	0.512
将来育児をするのが楽しみだ	0.045	0.283	0.309	-0.116	-0.123	0.409
育児は楽しいと思う	0.070	0.374	0.020	0.002	-0.142	0.393
＜育児への否定的評価＞						
育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなると思う	-0.052	-0.038	0.141	-0.006	0.707	0.144
育児をしている間に、世の中の動きから取り残されてしまうと思う	0.005	0.080	0.018	-0.044	0.474	0.018
育児をしている親は疲れてみずばらしく見える	0.080	0.038	-0.204	-0.019	0.391	-0.045
育児をしていると自分の好きなことができない	-0.006	-0.046	0.031	-0.037	0.329	-0.092
自分は育児をすることに自信がない	-0.025	0.07	-0.303	-0.157	0.312	-0.178
育児はつらい仕事だと思う	-0.019	-0.162	0.080	0.014	0.295	-0.023

については男女に差は見られなかった。乳幼児と関わる体験頻度別に分析したところ、乳幼児と関わる体験が多いほど、得点が高いことが示された ( $F=16.155$ ,  $df=4/173$ ,  $p<.01$ )。とくに、経験があるかないかで大きな差がみられるとともに、毎日と回答のあった者の得点が際立って高かった。

### (3) 「親になるイメージ」に関する分析

「親になるイメージ」因子について、性・専攻別の

平均得点および標準誤差を図5に、乳幼児と関わる体験頻度別の平均得点および標準誤差を図6に示した。保育系の学生が他の学生に比べて有意に得点が高く ( $F=11.333$ ,  $df=2/175$ ,  $p<.01$ )、保育系以外の学生については男女に差はみられなかった。乳幼児と関わる体験頻度別に分析したところ、乳幼児と関わる体験が多いほど、得点が高いことが示された ( $F=9.204$ ,  $df=4/173$ ,  $p<.01$ )。

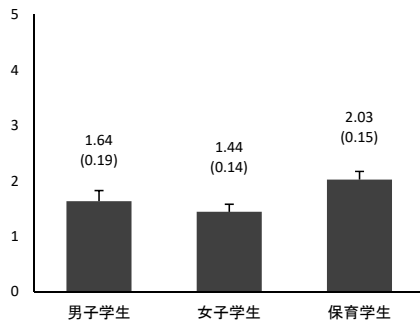


図1 「育児体験機会」の性・専攻別の平均得点

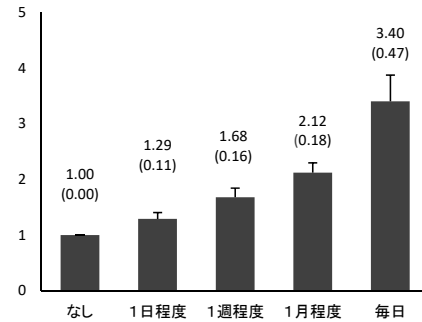


図2 「育児体験機会」の乳幼児との関わり体験頻度別の平均得点

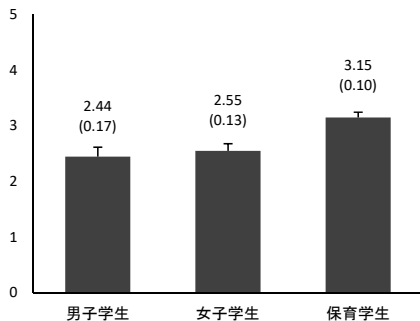


図3 「育児への自信」の性・専攻別の平均得点

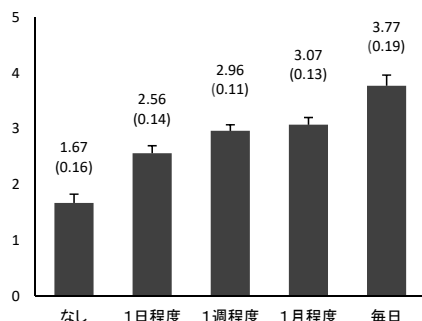


図4 「育児への自信」の乳幼児との関わり体験頻度別の平均得点

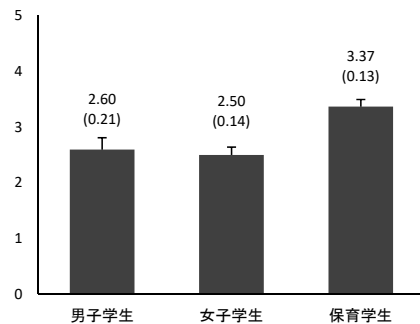


図5 「親になるイメージ」の性・専攻別の平均得点

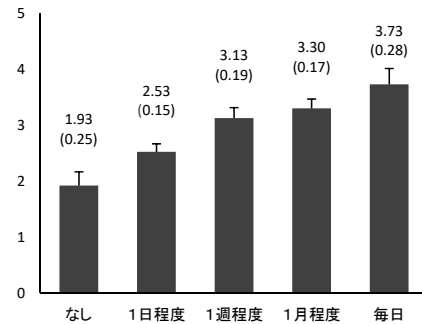


図6 「親になるイメージ」の乳幼児との関わり体験頻度別の平均得点

(4) 「乳幼児への好意感情」に関する分析

「乳幼児への好意感情」因子について、性・専攻別の平均得点および標準誤差を図7に、乳幼児と関わる体験頻度別の平均得点および標準誤差を図8に示した。保育系の学生が他の学生に比べて有意に得点が高く ( $F=34.955, df=2/175, p<.01$ ), 保育系以外の学生については男女に差はみられなかった。乳幼児と関わる体験頻度別に分析したところ、乳幼児と関わる体験が

多いほど得点が高いが ( $F=19.180, df=4/173, p<.01$ ), 1週程度以上だとほとんど差がみられなかった。

(5) 「育児への肯定的評価」に関する分析

「育児への肯定的評価」因子について、性・専攻別の平均得点および標準誤差を図9に、乳幼児と関わる体験頻度別の平均得点および標準誤差を図10に示した。保育系の学生が他の学生に比べて有意に得点が高く ( $F=29.891, df=2/175, p<.01$ ), 保育系以外の学

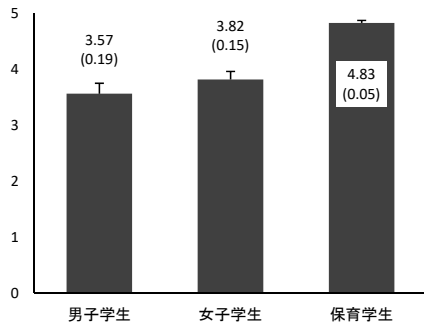


図7 「乳児への好意感情」の性・専攻別の平均得点

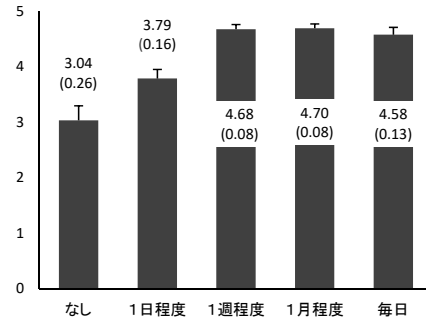


図8 「乳児への好意感情」の乳幼児との関わり体験頻度別の平均得点

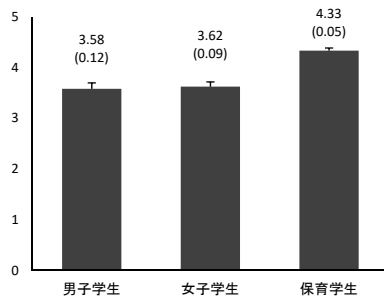


図9 「育児への肯定的評価」の性・専攻別の平均得点

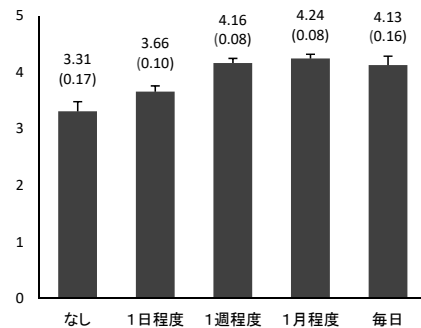


図10 「育児への肯定的評価」の乳幼児との関わり体験頻度別の平均得点

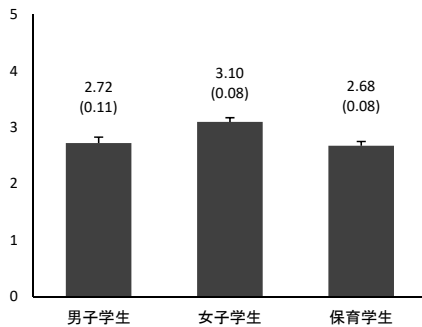


図11 「育児への否定的評価」の性・専攻別の平均得点

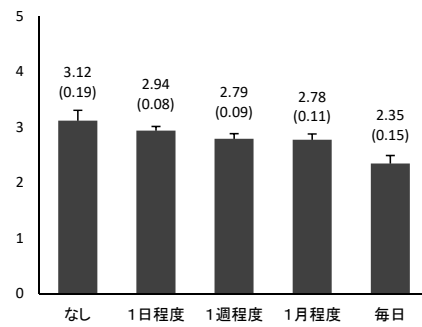


図12 「育児への否定的評価」の乳幼児との関わり体験頻度別の平均得点

生については男女に差はみられなかった。乳幼児と関わる体験頻度別に分析したところ、乳幼児と関わる体験が多いほど得点が高いが ( $F=11.522$ ,  $df=4/173$ ,  $p<.01$ ), 1 週程度以上だとほとんど差がみられなかった。

#### (6) 「育児への否定的評価」に関する分析

「育児への否定的評価」因子について、性・専攻別の平均得点および標準誤差を図 11 に、乳幼児と関わる体験頻度別の平均得点および標準誤差を図 12 に示した。一般の女子学生の得点が最も高く、保育系の学生が最も低い結果であり、両者の間に有意差が見られた ( $F=8.131$ ,  $df=2/175$ ,  $p<.01$ )。男子学生は両者の中間であった。乳幼児と関わる体験頻度別に分析したところ、わずかではあるが、乳幼児と関わる体験が多いほど得点が高いことが示され、とくに毎日と回答のあった者の得点が際立って低かった ( $F=3.561$ ,  $df=4/173$ ,  $p<.01$ )。

#### 考 察

本研究は、乳幼児と触れ合ったり世話をしたりするような体験の有無や、そうした体験機会の頻度が、親としての準備性の形成に及ぼす影響を検討した。その結果、全般的にみて、乳幼児と関わる体験のある者は体験のない者よりも親としての準備性が高く、また乳幼児と関わる体験の頻度が多い者ほど親としての準備性が高い傾向が示された。こうした結果は、おおむね先行研究で示されてきた結果と一致するものであった。

一方、親としての準備性は幾つかの因子から構成されており、全体としては前段の通りであるが、因子毎に見てみると、乳幼児との関わり頻度と親性準備性得点との関係には若干のパターンの違いもみられた。今回の結果からは、このパターンの違いは大きく 3 つのタイプに分類される。

第一のパターンは、文字通り、乳幼児との関わり頻度が増加するにつれて準備性得点が少しずつ増加しているものである。「育児体験の機会」、「育児への自信」、「親になるイメージ」の 3 因子がこれに当てはまる。

第二のパターンは、乳幼児との関わり頻度がある程度（今回の結果では 1 週程度）までは得点が増加

するが、一定程度以上は子どもとの関わり頻度が増えなくても準備性得点が頭打ちになり、あまり高くないものである。「乳幼児への好意感情」や「育児への肯定的評価」の 2 因子がこれに当てはまる。

第三のパターンは、乳幼児との関わり頻度が少ないうちは変化が小さいが、乳幼児との関わり頻度が多くなって（今回の結果の場合はほぼ毎日となって）大きく変化するものである。「育児への否定的評価」の因子がこれに当てはまる。

これら 3 つのパターンを組み合わせると、親としての準備性の形成は次のようなプロセスを経ていると考えられる。乳幼児と関わる体験では、「楽しい」とか「子どもがかわいい」という肯定的な感情と同時に「大変だ」とか「つらい」とかいう否定的な感情を伴う。それゆえ、乳幼児と関わる体験を通して、まずは「乳幼児への好意感情」や「育児への肯定的評価」が高まると同時に、「育児への否定的評価」も同時に高まる。乳幼児と関わる体験を重ねるうちに、「育児への自信」が徐々に高まり、自分自身が「親になるイメージ」も徐々に形成されていく。育児への自信が強くなり、親としてのイメージが確固としたものになるにつれ、それまでもっていた「育児への否定的評価」が最後に減少していくというプロセスである。

今回の結果に示されるようなパターンの違いがあり、前段で論述したプロセスがあるとするならば、親としての準備性のどの側面を育成しようとするかによって、必要な乳幼児との関わり頻度が異なることになる。たとえば、「乳幼児への好意感情」を育成しようとするならば、ちょっとした乳幼児と関わる機会を設定すればよく、あまり頻度が多くななくてもよいことになる。その一方で、「育児への否定的評価」を十分に払拭しようとするならば、ちょっとした乳幼児との関わりでは不十分であり、乳幼児と関わる機会をかなりの頻度で体験することが必要となる。乳幼児と関わる機会を設定する取り組みが様々になされているが、こうした取り組みで何が育成されるかをあらためて検討することも必要かもしれない。

今回、調査対象とした学生には保育を専攻する学生が含まれていたが、保育を専攻する学生は他の学生よりも、全般的に親としての準備性が高いという結果が

示された。この結果も、先行研究で示されている結果と一致するものであった。なお、今回の調査からは、保育を専攻することで親としての準備性が高くなったのか、もともと親としての準備性が高い者が保育を目指しているのかはわからない。今回の調査方法の反省点にもなるが、保育を専攻する学生に対しても、一般学生を想定した調査用紙で調査を実施した。そのため、保育を専攻する学生は保育実習という形で乳幼児と関わる体験を相当もつことになるが、この保育実習としての体験と保育実習以外での乳幼児と関わる体験を分離して分析することができなかつた。これを分離して分析することで、保育を専攻する学生の特徴をより詳細に理解することができるであろう。

今回の調査では、男子学生数が少なかったため十分な結論を出すことは難しいが、一般学生における男女差はほとんど見られなかつた。親としての準備性については男女で差がないという研究と男女で異なるという研究が存在する。男子学生のデータを増やした上でのさらなる検討が必要であろう。今回の結果の中で最も男女差が大きかったのは「育児への否定的評価」であり、女子学生が男子学生よりもやや高いという結果であった。男女共生社会と言っても、世間的にはまだまだ女性の子育て役割期待が高く、女子学生の方がより現実的に育児を評価しているのかもしれない。

本研究では、乳幼児と関わる体験の頻度が多いほど親としての準備性が高まるということ、親としての準備性のなかにも幾つかの側面があり、その側面によって結果のパターンが異なることが示された。小さい子どもと触れ合う場が普段の生活の中から減少していく中で、乳幼児と関わる機会を意図的に設定する取り組みは、親としての準備性を高めるのに必要である。よりよい親育ちのために、単発的な活動だけで終わらせるのではなく、中長期的に持続した活動を系統的に行うことが重要である。

## 付記

本論文は、仁愛大学人間学部心理学科 辻康人氏(2011年卒業)の卒業論文作成時に取得したデータを再分析して、考察を加えたものである。

## 引用文献

- 青木まり・松井豊 1988 青年期後期における女性性の発達Ⅱ：異性性と母性準備性の構造について 北海道教育大学紀要：第1部C, 39, 85-94.
- 井上義朗・深谷和子 1983 青年の親準備性をめぐって 周産期医学, 13, 2249-2250.
- 川瀬隆千 2009 学生保育サポーター事業のプログラム評価 宮崎公立大学人文学部紀要, 16 (1), 45-62.
- 川瀬隆千 2010 大学生の親準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要, 17 (1), 29-40.
- 松岡治子・和田佳子・花沢誠一 2000 青年期男女における親性準備性の性差および母性度・父性度の発達：親性準備性の研究 (1) (2) 母性衛生, 41, 492-505.
- 宮崎 豊 2003 母子保健事業における思春期子育て体験に関する一考察 千葉明德短期大学紀要, 24, 29-38.
- 森 俊之 2002 保育士をめざしている学生の親性準備性の発達 仁愛女子短期大学研究紀要, 34, 39-46.
- 森下節子 1992 看護学生の母性意識の発達 —母性看護学実習にみる意識の変容— 母性衛生, 33, 297-303.
- 中西雪夫・牧野カツコ 1989 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育：準備状態の形成に影響を与える要因 日本家庭科教育学会, 32, 55-59.
- 岡本祐子・古賀真紀子 2004 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, 4, 159-172.
- 斎藤益子・瀬口チホ・本松研一 1992 妊婦の母性意識とその形成に影響する因子：母親・夫・幼い子どもとの関わりより 母性衛生, 33, 64-72.
- 佐々木綾子 2007 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, 8 (1/2), 41-50.